

## 「古事記」の稲羽素兎に外用処置 された蒲の穂綿—考

き 木      むら 村      まさ 雅      かず 一

キーワード：古事記，蒲（ガマ），穂黄（ホオウ），穂綿（ホワタ），大国主命

### 要 旨

「古事記」の稲羽素兎の項で、素兎がくるまったのは穂綿？穂黄？と疑問の生じた蒲（ガマ）について考察した。一般的には童謡の「大黒さま」で歌われて、皮をむかれたシロウサギはガマの穂綿にくるまって本の膚に戻ったと思われている。しかし古事記で大国主が素兎に指示したのは穂黄である。

穂黄とは？蒲のどの部分なのか？また穂黄には薬効を示す成分があるのか？を調べた。また蒲の穂、蒲の穂綿そして、穂黄のそれぞれの違いと区別も説明した。

そして、皮をむかれた赤膚の「稲羽素兎」に塗布された穂黄（ほおう）は雄花穂の花粉で、多くの効能を有しており、今も使われている生薬の代表的なものであった。

### は じ め に

『古事記』は元明天皇の詔により712（和銅5）年、太安万侶が撰録した歴史書である。撰録から既に1300年という年月を経ている。

『古事記』に記されている稲羽素兎神話は、<sup>いなばのしろうさぎ</sup>「いなばのシロウサギ」として童話や童謡にも歌われ、広く知られている。例えば、1905（明治38）年の石原和三郎作詞、田村寅蔵作曲、尋常小学校唱歌「大こくさま」は次のような歌である。

1. おおきなふくろをかたにかけ、だいこくさ

まが きかかると、ここにいなばの しろうさぎ、  
かわをむかれて、あかはだか

2. だいこくさまは あわれがり「きれいなみ  
ずに みをあらい がまのほわたに くるまれ」  
と よくよくおしえて やりました（以下3, 4  
略, 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』1958  
（昭和33）年 岩波書店）

サメに毛をむしられ、赤膚にされ痛くて泣いて  
いるシロウサギの傷が大国主命のいうとおり、蒲  
の穂綿にくるまったところ、もとの膚に戻った、  
というのである。

古事記「稲羽素兎」の項においては、<sup>おおくにぬしのみこと</sup>大国主命  
は素兎に「急いで、そこの河口へ行き、淡水で体  
を洗い、その河口の穂黄を取り、敷き散らし、そ

の上に寝返りして、ころがれば、もとの<sup>はだ</sup>膚のごと必ず癒える」と仰いました。そこで素兎は教えられたとおりにしたところ、もとの膚にもどった、と記されている<sup>1)</sup>。

『古事記』の記載と一般に知られた話には明らかな違いがある。

素兎は、穂綿で治ったのか、素兎が寝ころんだ穂黄とは、また蒲の穂綿とは何か、以下に考察してみたいと思う。

### (1) <sup>がま</sup>蒲 の こと

漢字では蒲、漢名では黄蒲、万葉仮名では賀麻と表した。

蒲は川、田圃などの湿地に群生する多年草で、1～1.5mの高さになる。

この蒲は、長い葉や丸い茎を用いて<sup>むしろ</sup>筵、<sup>かご</sup>籠、<sup>すだれ</sup>簾が作られるので御簾草（ミスグサ）ともいう。茎の頂きには雄花の集まった穂、続いては雌花の集まった穂をつける。

わが国には蒲は3種類ある。コガマとヒメガマはガマより背が低い。

コガマとガマの雄花、雌花はつながっているが、日本原産のヒメガマでは雄花と雌花の間には、隔たりが数センチある。

### (2) <sup>ほ おう</sup>穂黄 の こと

蒲は初夏に茎を伸ばし円柱形の穂をつける。上半部は細くて、雄花が集まる。開花時、黄色の葯が一面に出てくるので、この雄花穂を集めて乾燥させ、ローラーで挽き、黄色の花粉を集めたのが<sup>ほ おう</sup>穂黄である。すなわち、穂黄は蒲の上部にある雄花の花粉であり、花ではない<sup>2)</sup>。

この穂黄こそ大国主命が傷ついた素兎に、転がって皮膚につけるようにと指示したものである。



図1 初夏の雄花穂

蒲の細い先端部の雄花穂を乾燥させて集めた花粉が穂黄である。

### (3) 穂黄の薬効

穂黄は、<sup>なま</sup>生（花粉）のまま局所に用いると<sup>かっけつ</sup>活血<sup>きよ お</sup>虚癆、すなわち血流を良くして止血作用を発揮する。さらに痛みを軽減する効能もある。外傷、口内痛、歯痛、打撲痛に有効であり、軟膏基材に混ぜて貼付もされる。

内服では収斂止血、すなわち（出血の部分の）経絡を引き締めて止血する。しかし血流は停滞しないので、排尿痛、乳腺炎、無月経、子宮出血、鼻血などに有効である。

中国では空気を遮断せずに黒焼きにして、局所に用い、収斂性止血の効能を増強している<sup>3)</sup>。

蒲は、エジプトのパピルスと同じ植物の仲間なので、史上最も長く記録されている種類であり、中国の神農本草経（BC 200～AD 100の書）、つまり2000年前までその使用を、さかのぼることができる<sup>4)</sup>。

蒲の雄花部は夏を迎える6月末にはもう無くなり、下部の黄褐色で太いソーセージ様の雌花部が残って、秋から冬の長い期間、人目に触れる。これが、「蒲の穂」である。この蒲の穂は華道の花材にもなり、華道展などにおいてその優雅な美しさを見ることができる。

#### (4) 蒲の穂綿とは

蒲の穂とは雄花、雌花の花穂の雌花部のことである。この部分は綿屑のような冠毛を持った果実で、風で綿毛のように飛ぶ景色から、蒲の穂綿と呼ばれる。このソフトで細やかな印象がいかにも傷を治した優しいイメージに、つながったのだろう。この種子はやがて飛んでいった湿地で生育する。

この蒲の穂や、蒲の穂綿の上に傷ついた素兎が寝ころぶと、小さい果実がチクチクと刺さって素兎は一層強い痛みを苦しんだことであろう。

雌花部には赤裸の素兎をもとの膚に戻す成分はまったくない。

『古事記』の稲羽素兎の項でも、蒲の穂綿についての記述はない。

『古事記』は、蒲の雄花部の花穂の花粉（穂黄）が用いられ素兎がもとの膚に戻った、と記述している。

#### (5) 穂黄（蒲の花粉）の成分と効用

穂黄には代表的な成分として、イソラムネチン、 $\alpha$ -ティファステロールム、 $\beta$ -シトステロールが含まれている。それぞれの効能は次のようである。

- ・イソラムネチンは抗酸化作用の強い物質で動脈硬化予防、循環障害、皮膚老化予防、抗炎症作用、皮膚再生作用、脳代謝改善作用さらに血管収縮作用、止血作用もある。



図2 蒲の穂

冬に目につくソーセージ様の雌花穂のことである。



図3 蒲の穂綿

雌花穂から小さい落下傘が飛び立つ。  
この綿毛の根部に種子がある。

- ・ $\alpha$ -ティファステロールムは多くのポリフェノールを含んで抗酸化作用があり、止血、利尿作用があり、さらに多量では発癌物質の活性化を阻害する作用がある。
- ・ $\beta$ -シトステロールは脂質異常症、前立腺肥大症、前立腺ガン、乳ガン、脱毛症に用いられる。また、利尿、血管収縮の作用がある<sup>5,6)</sup>。  
このほか、リノレイン酸、パルミチン酸、ステ

アリン酸, ペンタコサンが含まれている<sup>4,6)</sup>。

#### (6) 穂黄の適応と商品化

穂黄の成分の効能, 効果から化粧品にはすでに使用されている。米国では $\beta$ -シトステロールに脂質代謝改善のエヴィデンスがあることがFDA (アメリカ食品医薬品局) で認められ, 食品のマーガリンの中に入っている。また, 歯痛, 口内痛には直接塗布を, 熱傷の場合には貼布され, 打撲痛には湿布薬として用いられている<sup>7)</sup>。

さらに, 内用薬として止血, 利尿, 吐血, 子宮出血, 血尿, 痔出血, 鼻の出血に用いられるが, 子宮を収縮させるので妊婦には適応はない。

江戸時代, 安永元 (1772) 年創業の松江市末次本町の山口薬局 (明治時代には名医, 松本良順先生も逗留して診療) の妙薬集には, 穂黄末が泌尿器疾患治療の薬剤として, 記載があり, 今も用いられている<sup>(註)</sup>。

### ま と め

#### (大国主命の, 穂黄による力の発揮)

大国主命の指示で, 素戔は自分の膚を真水で洗い, 蒲の穂黄 (花粉) を塗って, 本<sup>1)</sup>の膚に戻った。蒲の穂や, 蒲の穂綿によって, 本に戻ったのではない。すなわち, キズからの出血を止めること,

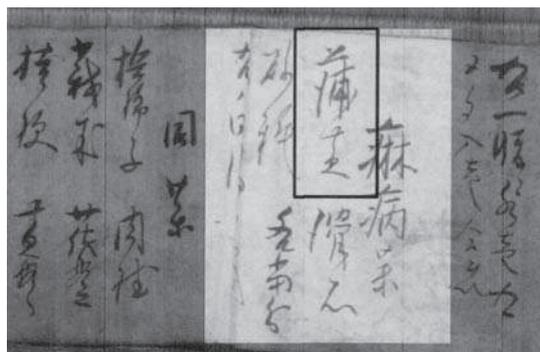


図4 穂黄末の処方

山口薬局 (松江市) の妙薬集に記載されて今も使用されている。

そして痛みを軽くすること, 次いで皮膚再生という予測される経過は, 穂黄の成分と効能から, 素戔のその時の容態にぴったり合致した薬であった。

大国主命は我が国の医療の祖とされる。

付記: 本稿の要旨は平成23年3月31日, 出雲市で開催された日本皮膚科学会, 第121回山陰・第17回島根合同開催地方会において述べた。

資料の検索にあたっては島根県立図書館資料室の皆様にお世話になった。また, 松江市末次本町山口薬局の山口邦子, 純一両氏からは貴重な資料を快く提供頂いた。さらに前県薬剤師会会長田中慎二先生, 松江市史編纂委員 勝部 昭先生からも御教示等を得た。記して, 心から感謝申し上げる。

### 参 考 文 献

- 1) 倉野憲司 校注, 古事記. ワイド版岩波文庫48, 岩波書店 2011: 48-49.
  - 2) 堀 勝, 原色植物観察図鑑 保育社, 1973: 144.
  - 3) 眞柳 誠, 『中国本草図録』中央公論社 1993: 巻4. 207, 巻5. 191.
  - 4) 岡田 稔, 原色新訂 牧野和漢薬草大図鑑, 北隆館. 2002: 584-585.
  - 5) 小林彰夫, 『天然食品・薬品・香粧品の事典』, 朝倉書店, 1999: 331-332
  - 6) 田中平三, 『健康食品・サプリメントのすべて』, 同文書院, 2011: 575-576
- 注) 山口薬局 (島根県) 歴史のある薬局 日本薬剤師会雑誌 2011, 11号: 101.